

〔論 文〕

波佐見焼の窯業集落である中尾郷の景観の特徴に関する研究

大森洋子^{*1}

A Study of the Landscape Characteristics of Nakao-go, a Hasami-yaki Pottery Village

Yoko OMORI^{*1}

Abstract

Hasami-machi in Higashisonogi-gun, Nagasaki Prefecture, has been renowned for its pottery industry since the Edo period. Nakao-go, the hub of pottery production in Hasami-machi during the Edo, which continues to this day, presents a cultural landscape sculpted by this enduring industry. Therefore, this study aimed to describe the characteristics of Nakao-go's landscape, which has been a center for mass porcelain production since the Edo period. The research elucidated various historical elements in Nakao-go, including remnants of Edo period climbing kilns, residences of Meiji period pottery factory owners, early Showa period coal kiln chimneys, and contemporary pottery factories. The landscape shows the history of the pottery industry..

Keywords: Hasami-yaki, landscape of Pottery Village, Nakao-go, Traditional house of a pottery factory owner

1. 研究の目的と位置づけ

1・1 研究の目的と位置付け

長崎県東彼杵郡波佐見町は江戸期より焼き物を主産業としてきた。町内に広く窯業関係の工場が分布する。波佐見町の中でも江戸期に焼き物の中心地として栄え現在も生産を続けている中尾郷の景観は、生業が形成してきた文化的景観である。窯業集落の景観を扱った論文としては伝統工法を守る小鹿田焼の里の景観の変容を明らかにした山口らの論文¹⁾、小石原焼の里の作陶と景観の関係を明らかにした丸谷らの論文²⁾がある。本論文では、これらの論文を参考にしつつ、これら2地区とは異なり江戸時代より磁器の大量生産を行ってきた中尾郷の景観の特徴を明らかにすることを目的に研究を行った。

1・2 研究の方法

研究は以下の調査と分析により行った。

- ①中尾郷に関する立地的特徴や窯業の歴史について、波佐見町史や窯業関係の資料により把握する。
- ②現在の景観を把握するために、景観の構成要素である、建物、工作物、水路などの分布と特徴を現地調査により把握する。建物は全戸の構造や屋根の形式、外壁の仕上げと用途等を外観調査によってデータをとり、位置を地図にプロットした。また、一部の所有者にヒアリングを行い建設年代と増改築の有無を把握した。
- ③かつての製陶作業がどこで行われ、どのように作業場が変遷していったかを把握するために、現存している窯元住宅の中から明治、大正、昭和初期と建設年代の異なる主屋3棟、作業場1棟を選び実測調査を行い平面図を作製した。同時に所有者へのヒアリングや痕跡調査及び古写真より、家屋の特徴や使われ方の変遷を分析した。
- ④以上のデータから、中尾地区の景観の特徴を明らかにした。

2. 波佐見焼きと中尾郷の歴史

2・1 中尾郷の地勢

波佐見町は西は佐世保市東は佐賀県武雄市・嬉野市、北部は佐賀県の有田町と接しており、長崎県と佐賀県の県境に位置している。周囲を山林に囲まれた盆地となっており、南北に約7km、東西約10.5km、総面積56.0km²で県内唯一の内陸地である。今回調査した中尾郷は波佐見町の南東に位置し急峻な北側斜面に拓かれた窯業集落である。集落を見下ろすように南東に陶石を産する白岳がある。周囲を高い山に囲まれた比較的広い谷の中央を中尾川が北流する。中尾郷の人口は令和5年9月末現在で296人、世帯数は143世帯となっている。

^{*1} 建築・設備工学科

2023年10月16日受理

2・2 窯業の歴史

(1) 波佐見焼の開窯から江戸時代末まで

波佐見町における窯業は豊臣秀吉による朝鮮出兵、文禄・慶長の役で連れてこられた陶工、李祐慶らによって1590年代に開始されたと伝えられている。波佐見焼は波佐見町が属していた大村藩の藩窯ではないが、藩が窯の燃料であるアカマツや良質な釉薬であるイス灰の元となるイスノキを他藩から調達し、染付の顔料で中国からの輸入品である呉須を出島で調達する等の支援を行っていた。隣の三股郷には皿山役所が置かれ、中尾郷にはその支所があり、焼物の出荷の際に運上銀（税金）の徴収を行っていた。梱包された焼物は陸路で伊万里港へ運ばれ、そこから船で出荷された。全国的には伊万里焼と呼ばれていた。江戸時代の波佐見焼の発展は資料によれば次の5つの時期に分かれる。

- ①波佐見焼の曙（1590年代～1610年代）：陶器のみを生産していた時期で下稗木場に窯が残る。
- ②磁器の生産（1610年代～1630年代）：陶器の生産に加え磁器の生産が開始される。畑ノ原に窯が残る。
- ③青磁の時代（1630年代～1650年代）：青磁を中心に生産していた時期で、この頃から陶器の生産はやめ、磁器が中心となる。陶石が採れる三股郷に窯が残る。
- ④：海外輸出時代（1650年代～1680年代）：中国で内乱が起これ中国磁器の海外輸出が止まり、それに替わって波佐見や有田などの肥前産の陶磁器が海外に大量に輸出される。染付碗や青磁大皿を多く生産していた。三股郷に隣接する白岳で陶石が産出されることから、その麓の比較的広い谷に1640年代に窯業集落が拓かれたのが中尾郷である。白岳で産出される陶石は熱水作用を受けていない流紋岩であり、磁器のボディを成形することはできず、釉薬としてあるいは三股郷で産出する陶石と混ぜて使用されていた。
- ⑤大量生産時代（1680年代～1860年代）：中国の内乱が収まると中国磁器の輸出が再開され、肥前の窯業は海外輸出から国内向けの生産に主力を移した。波佐見では「くらわんか碗」と呼ばれる庶民向けの安価な日用食器を大量に生産し、その中心が全長170mの大新登窯、160mの中尾上登窯、120mの中尾下登窯の3基の巨大な登り窯を持つ中尾郷であった。この頃は唐白150基が中尾川に配備され、陶石を粉碎していた。

(2) 近代以降

明治時代になり大村藩が廃され支援がなくなると巨大な登り窯は廃され、その一部を使用したり、個人所有の小規模な窯へ転じた。明治16年頃から陶石の粉碎は唐臼から水車へ変わっていった。明治・大正時代は江戸時代に引き続いて日用食器の生産が行われ、特に徳利生産が盛んであった。また、この時代は様々な新しい技法（鋳込み、石膏型、機械ロクロなど）の開発導入によって、近代化が進む。昭和初期以降、波佐見では登り窯から石炭窯に生産の主役が交代し、昭和40年代からはガス窯が導入された。また日用食器に加え、洋食器や酒樽などが生産されるようになる。戦時中にダメージを受けていた波佐見窯業は、昭和30年代の神武景気を足掛かりとして復活を遂げ、その後の高度経済成長期に飛躍的な発展をする。昭和53年（1978）に波佐見焼は経済産業大臣により「伝統的工芸品」に指定された。

2・3 作陶工程の変化

作陶の機械化が進み、窯の燃料も変化してきたことから工程に以下のような変化がある。江戸期の作陶は水を動力として利用する以外は人力により行われていた。工程は①陶石の採取、②陶石の粉碎、③水簸（すいひ）と水抜き、④轆轤による成形、⑤乾燥、⑥素焼、⑦絵付け、⑧施釉、⑨焼成となる。先ず陶石を各窯元が所有する唐臼に粉末状になるまで打たせる。水簸された陶土は、オロで陶土の水分が抜かれる。手ですぐえる状態になったら素焼き鉢に盛り水分を抜き適度な柔らかさにする。それを用いて蹴轆轤で成形を行い、庭で天日干しし素焼きを行う。その後絵付けと施釉を行い焼成する。焼成はアカマツを燃料に登り窯で行う。

近代になると個人窯へ転じ、また新しい技法の導入や機械化が進み、分業体制がしかれることになる。現在は天草陶石を粉碎して粘土にする陶土業、器の成形をする生地業、それを素焼きし釉薬をかけたり上絵付けをして焼成する窯元に大きく分かれる（図1参照）。陶土業はスタンパーの導入により製土能力が向上したが、波佐見焼の陶土業は規模が小さく、波佐見焼づくりに消費する陶土の3/4以上は嬉野市塩田の陶土に依存している。

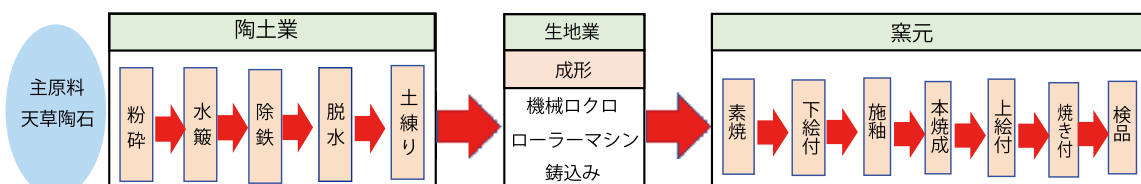


Fig.1 Current pottery making process

2・3 波佐見焼の名称と現在の取り組み

地元では波佐見町で産出する器は波佐見焼と呼ばれていたが、江戸時代は伊万里港から波佐見焼を出荷していたことから全国的には伊万里焼と呼ばれ、明治になると隣町の有田駅から出荷していたことから有田焼と呼ばれていた。平成 13 年（2001）に牛肉の産地偽装事件以来、商品の産地偽装が世間の話題となり、有田陶業協同組合より有田焼の名称を使用しないことの要望があった。それ以降波佐見焼の名称で全国へ出荷することとなった。平成 17 年より東京在住の陶器プロデューサーをアドバイザーに迎え、デザインの向上に努めるとともに東京ドームで開催されている「テーブルウェア・フェスティバル」に毎年 15 社程度の窯元が出展し、波佐見焼のブランド化に取り組んできた。その甲斐があり現在では全国的に名前が知られるようになった。中尾郷で焼かれた器は問屋を通して販売されるため、中尾郷内で販売することはイベント以外ではなかった。しかし平成 8 年に集落南端の高台に立地する集会施設を建て替える際に、中尾郷の 17 の窯元の作品を一堂に集めて販売する中尾山交流館がオープンした。初めて中尾郷に波佐見焼販売店が誕生した。更に集落中央付近に立地する焼き物の卸商であった奥川家住宅（明治 23 年（1890）建築）が波佐見焼販売店「赤井倉」として平成 13 年に改修され開業した。それ以降は徐々に窯元も店頭販売を開始している。

3. 中尾郷の集落景観

3・1 現在の集落景観

中尾郷の集落全体を地形や土地利用から見た大景観とすれば、それを構成している小景観は、山林、道路、河川、屋敷地、畑地となる。その中で窯業と関わりが深い屋敷地と河川についてどのような構成要素があり、どのような配置秩序があるのか、考察を行った。

(1) 大景観

集落は北流する中尾川に沿った急傾斜の谷地の標高 120 ～ 210m に位置する敷地に密集して建っている。奥まった南部で谷地はやや広がりを持つ。中尾川に並行して集落を縦断する町道が走り、南端で西に折れ、尾根を越え鬼木郷へとつながる。町道から集落の東西の斜面に迷路のように路地が走りどの路地も急な坂道となっている。東の高台には陶山神社と観音堂が立地し、南端の山腹には稲荷神社が立地し、宗教施設が集落を囲むような配置になっている。斜面地を利用して登り窯が築かれていたが、現在は史跡以外の登り窯跡は宅地や山林として利用されている。集落を取り囲むように山が迫り、南東の端にかつて陶石を採取していた白岳が聳える。集落周辺の斜面には、石炭窯が導入されるまでは窯の燃料となるアカマツが植林されていたが、戦後はスギとヒノキが植林されている。中尾郷の北側の井石郷には棚田が見られるが、中尾郷内には水田はなく、また畑地もごくわずかで農家は少ない。



Fig. 2 The landscape of Nakao-go

(2) 屋敷地の景観

斜面地に石積みの擁壁を築き建物を建てているため、多くは庭園や畑地を造る余裕がなく、建物で埋め尽くされている。個人の登窯跡に作業場を建設している場合もあり、空いたスペースに作業場を増築していった様子が見える。主屋の正面に関しては、町道沿いは町道に正面を向け、奥まった敷地は南に正面を向けている家屋が多い。窯業を営んでいた伝統的な主屋正面には成形した器を天日干しするための庭が設けられ、庭を挟んで作業場が配置されている。しかし現在は機械化が進み天日干しすることも少なくなり、また大量生産のために作業場の規模が大きくなり、庭や登り窯跡などの空いたスペースに作業場が建てられ、主屋と作業場の配置や向きに一定の秩序は見いだせなくなっている。

(3) 河川景観

北流する中尾川とそれに並行して西端を走る水路、及び東側斜面から中尾川に集落中央部で合流する水路が主な河川であるが、中尾川以外は暗渠化されている部分が多い。江戸期はこれらの河川で 150 基の唐臼が働いていた。中尾川は昭和 27 年に大雨による氾濫を起こし、死者 14 名となる大惨事となり、その後河川改修が実施された。川底が掘削され周囲の敷地や道路との段差が大きくなり、唐臼や水車が働いていた面影は失われている。しかし幸いにもコンクリート護岸は少なく、多くは割石の谷積となっている。

(4) 煙突

最も目立つ工作物は屋根より高く聳えている石炭窯のレンガ造煙突で8基ある（図3参照）。現在は使用されていないが、長崎県まちづくり景観資産に8基とも登録されている。その概要を表1にまとめた。



Fig. 3 Landscape with coal kiln chimneys remaining

Table 1 List of brick chimneys of coal kilns

名称	築年	内容
旧上広窯煙突	1955年	高さ14m程度。1970年頃まで使用。
旧筒峯製陶所煙突	1953年	高さ12～13m程度。1970年頃まで使用。
旧中安製陶所煙突	1960年	高さ12m程度。1970年頃まで使用。
光玉陶苑煙突	1955年	高さ15m程度。1970年頃まで使用。
光春窯煙突	1955年	高さ10m程度。1970年頃まで使用。
m工房(yuu&maki)煙突	1965年	高さは15～16m程度。
平井製陶所煙突	1955年	高さは15～16m程度。1970年頃まで使用。
トラスネ煙突 (旧山慶窯)	1925年	高さ17m程度。戦後、窯本体は解体されガス窯に替わる。

3・2 建物の外観の特徴

集落景観の重要な構成要素である建物について用途・構造・屋根形状及び材料について悉皆調査を行いリスト化するとともに地図にプロットした。中尾郷に立地する建物は315棟であった。その結果から以下のことが分かった。

①建物用途： 中尾郷に立地する315棟の建物の用途は多い順に主屋176棟（56%）、作業場49棟（16%）、倉庫41棟（13%）となっている。倉庫も窯業関係の倉庫が多く作業場も兼ねている場合もあり、大規模な窯業工場は平野部に移転したとはいえ、窯業作業場が多く立地し焼物の里としての性質を維持している。

②建物の構造と規模： 集落内の建物の構造は木造が299棟（95%）と最も多く、鉄骨造は窯業作業場などで14棟、RC造は2棟のみである。昭和40年以降建設の規模の大きい作業場は鉄骨造で造られているが、木造の作業場の方が42棟と多い。階数は3階建てが3棟あるのみで、平屋建てと2階建てが半数ずつとなっている。上屋梁間の規模は主屋は2.5間～3間が103棟（主屋の59%）と最も多く、作業場は3間～4間が（作業場の93%）が最も多い。全体でも上屋梁間は3間以下に75%が収まっている。景観を阻害する高層で大規模な建物はなく、低層の統一感のある景観となっている。

③屋根形状と材料： 屋根形状は切妻が200棟（63%）と多く、次いで入母屋64棟（20%）となっている。形は直屋が266棟、鉤屋49棟と84%が直屋である。材料は瓦葺き263棟（84%）、金属葺き21棟（7%）である。作業場は切妻平入りが多い。材料と屋根形状も統一感があり景観を阻害する建物は見当たらない。

Table 2 Number of buildings by use and structure

用途	木造		鉄骨造		RC造		計	
	棟数	割合	棟数	割合	棟数	割合	棟数	割合
主屋	174	55.2%	2	0.6%			176	55.9%
窯業作業場	43	13.7%	6	1.9%			49	15.6%
倉庫	39	12.4%	2	0.6%			41	13.0%
離れ	10	3.2%					10	3.2%
公共施設	6	1.9%	1	0.3%	1	0.3%	8	2.5%
店舗併用住宅	8	2.5%					8	2.5%
店舗	5	1.6%					5	1.6%
波佐見焼販売店	4	1.3%					4	1.3%
事務所併用住宅	2	0.6%	2	0.6%			4	1.3%
寺社	3	1.0%			1	0.3%	4	1.3%
事務所	2	0.6%					2	0.6%
窯併用住宅	2	0.6%					2	0.6%
宿泊施設	1	0.3%					1	0.3%
医院	1	0.3%					1	0.3%
計	300	95.2%	13	4.1%	2	0.6%	315	100.0%

Table 3 Number of buildings by number of floors

階数	棟数	割合
1階	148	47.1%
中2階	18	5.7%
2階	145	46.2%
3階	3	1.0%
計	314	100.0%

Table 4 Number of buildings by roof type

屋根形状	棟数	割合
切妻	200	63.5%
入母屋	64	20.3%
寄棟	41	13.0%
片流れ	9	2.9%
方形	1	0.3%
計	315	100.0%

Table 5 Number of buildings by length between beams

梁間(間)	棟数	割合
1 間	2	0.6%
1.5間	2	0.6%
2 間	63	20.1%
2.5間	72	23.0%
3 間	90	28.8%
3.5間	16	5.1%
4 間	43	13.7%
4.5間	4	1.3%
5 間	11	3.5%
5.5間	1	0.3%
6 間	1	0.3%
7 間	1	0.3%
8 間	1	0.3%
10 間	1	0.3%
不明	7	2.2%
計	315	100.6%

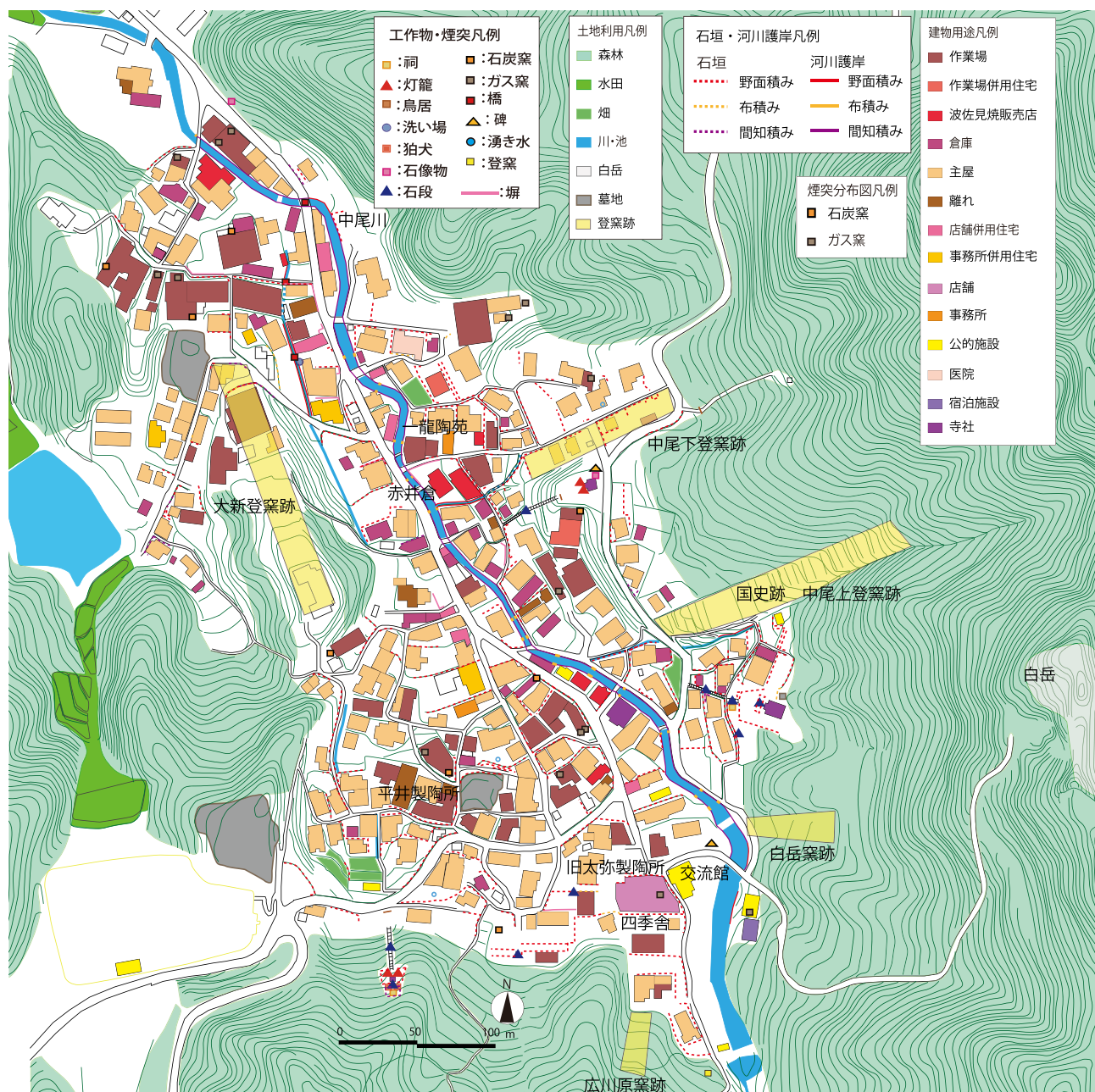


Fig. 4 Land use and distribution of landscape elements in Nakao-go

4. 窯元住宅と作業場の変遷

かつての製陶作業がどこで行われ、どのように作業場が変遷していったかを把握すると共に窯元住宅の特徴を明らかにするために、伝統家屋として残っている窯元住宅3棟、作業場1棟の実測調査と使われ方のヒアリングを行った

4・1 一龍陶苑（一瀬家）

下登窯があった坂道（当方通り）に南面する敷地で窯業の一龍陶苑を営んでいる。慶応元年（1865）にこの地で創業し、現在の代表で7代目となる。昭和48年（1973）に平野部の宿郷鹿山に工場を建設して操業を開始したが、中尾郷での絵付けや焼成作業も継続している。従業員数は現在6人である。

(1) 主屋の特徴

主屋は入母屋椋瓦葺き平入り2階建てで、敷地の奥の北端に南面して建つ。外壁は修理が行われており、現在は真壁漆喰塗りで南正面と東面は2階腰高まで簷子下見板張り、北面と西面



Fig. 5 The main house of Ichiryutoen with a Shikidai

は豎板張りとなっている。建築年は小屋裏に置かれていた破魔矢の墨書より、明治 17 年 4 月 2 日と判明している。現在は土間や奥の部屋の改修が行われているが、平面を復原すると以下になる。右手に土間がある喰違四間取りを基本として奥にも部屋を構える。表は 12.5 畳の御前と座敷が並び、奥に茶の間と納戸（寝室）が並ぶ。さらに奥に増改築により寝室がある。土間が広く、ここで作陶作業をしていた。土間の入り口は片引き大戸であり、現在も戸当りと小壁が残っている。その横には 1 間幅の式台と半間の手洗い場のような物が付く。式台からは御前へ上がる。式台の隣には帳部屋と呼ばれる 1.5 畳程度の事務室として使用する小部屋がある。座敷は 8 畳で床の間、床脇、出書院が付く。御前にはかつて皿板を架けていた棧（トンパンと呼ばれる）が残っており、窯元の家らしさが窺える。御前には囲炉裏がある。2 階の天井は低く、元は物置として利用されていたと考えられる。

(2) 建物配置の変遷

① 明治期から戦前までの建物配置

主屋の痕跡調査と窯元へのヒアリングから、戦前までは主屋の土間部分が広く取られ、ここで轆轤を回し施釉も行うなど、殆どの作陶作業は土間で行われていたことが分かった。土間に面した御前にはトンパンが設けられ成形した器の



Fig. 6 Changes in the building layout of Ichiryutoen

乾燥が行われていた。器の乾燥は主に主屋南の日当たりの良い庭で天日干しで行われるが、冬期は御前で囲炉裏の火による乾燥が行われていた。焼成は下登窯の2室を利用していた。

②昭和21年(1946)頃の建物配置

轆轤作業はまだ主屋の土間で行っていたが、主屋の南に東側隣地境界に沿うように作業場を新築し、1階で釉薬をかける仕上げを、2階で絵付けを行うようになった。庭の南端に薪を燃料とする単窯を築き焼成を行った。その後坂道の向かい側に轆轤を回す細工場を設け、土間での作業は行っていない。主屋の土間は部屋に改修され住宅専用となった。また、細工場の裏に型置き場を増築した。生地を外注するようになり細工場は昭和27年(1952)頃に撤去した。陶土は早い段階から購入し水簸は行っていなかった。

③昭和38年(1963)年頃の建物配置

敷地西側の水車小屋があった敷地を購入し石炭のシャトル・キルン窯を昭和38年(1963)に築いた。石炭窯導入時に薪の単窯を撤去し梱包等を行う作業場を建てた。その後重油窯に変わり、昭和44年(1969)にガス窯に変わった。その際に2階建てにして、1階にガス窯を置き、2階が絵付け室になった。

④現在の建物配置

昭和48年(1973)に平野部の宿郷鹿山に大型の工場を建設して操業を開始したが、中尾郷でも一部の絵付けや焼成作業を継続している。現在は東側の作業場2階の最初の絵付け室は事務所に、1階の仕上げ室は倉庫になっている。ガス窯がある作業場はそのまま残り、坂道向かいの細工場跡は駐車場、奥の型置き場は平成15年(2003)オープンギャラリーとなっている。

4・2 旧太弥製陶所

中央の町道を上った集落南端の四季舎の右手前に位置する敷地に旧太弥製陶所の主屋が建つ。建設年代は不明であるが、大正の初めの建設と言われている。太弥製陶所は中尾郷で窯業が開始された1600年代から続く長い歴史を持つ大規模な窯元で、平成2年(1990)に廃業した。従業員数は多い時で50人ぐらい、廃業直前で20人ぐらいであった。従業員宿舎も四季舎の北側の高台に建てられていた。現在は主屋と作業場4棟が残っている。作業場の一つは2011年に改修して飲食店の「四季舎」として活用されている。内部にはガス窯2基が現存している。

大正11年(1922)に佐世保市の宮地嶽神社の神官が家相を観た時に作成した主屋と作業場の配置図が保管されていたので、それを元に配置図を作製した。それと古写真を用いて当時の主屋の使われ方や、作業場の配置について記述する。

(1) 主屋

主屋は敷地の西端に東面して建てられ、北端から東側に座敷を突き出す鉤屋となっている。木造真壁造り平屋建て入母屋棧瓦葺平入りの建物で、周囲に下屋が回る。裏側にあたる西側にも部屋を斜めに突き出している。この部分は後の増築と考えら2階建てで従業員の部屋があった。更にその先には小屋と書かれている倉庫が建ち、倉庫南側に外部から入る便所がある。また裏庭には風呂場があり、近所の人も入浴しに来ていたという。平面は左手が土間の四間取りを基本とし、表の東側から日当たりの良い庭を囲むように座敷を突き出す。広い土間に轆轤が数基並べられて成型作業が行われていた。土間に面する御前には囲炉裏とトンパンがある。土間の出入り口横には御前に上がる式台が設けられ、その横には事務所として使用していた1畳程度の帳部屋がある。この配置も一龍陶苑と同じである。

(2) 建物配置の変遷

①大正11年の建物配置

敷地の西端に主屋が建ち、土間で轆轤による成型作業を行っていた。その主屋から東へ突き出した座敷に繋がるように、小屋と書かれている切妻棧瓦葺き2階建て作業場がある。この作業場は1階は検品や製品の荷造り場として利



Fig. 7 Oyaseitosyo around 1955



Fig. 8 Current Oyaseitosyo

用され、2 階は絵付け場で、北側と南側に連窓を設け明るい部屋となっている。古写真ではこの部屋に女性が並び絵付けを行っている。電動轆轤での絵付けも行われていた。絵付けは主に女性の仕事であった。作業場の更に東には、粉碎した陶石を水簸した後の泥水を濾過する「オロ」が置かれている。この頃までは窯元が陶土造りを行っていたことが分かる。

主屋と作業場に囲まれた日当たりの良い庭に器を天日干しするための皿板を架けるトンパンが3カ所書かれている。庭の東には敷地南端に沿って、堀川、小屋、素焼き窯が並び、更に水路を隔てて敷地東端に大型の小屋が置かれている。東側の道路の向かい側には薪を保管するタタラギ小屋があった。敷地南の道路の向かいには湧き水の井戸があり、そこから堀川へ水を流し、堀川で水簸を行っていたと考えられる。素焼き窯隣の小屋は薪小屋であり、東端の大型の小屋は釉薬を掛ける仕上げ場があった。登り窯は現四季舎の西端の斜面に築かれていた。

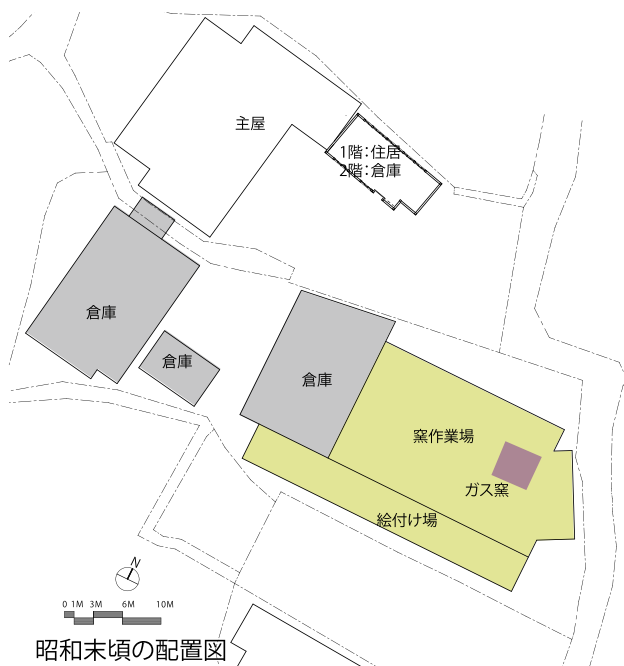
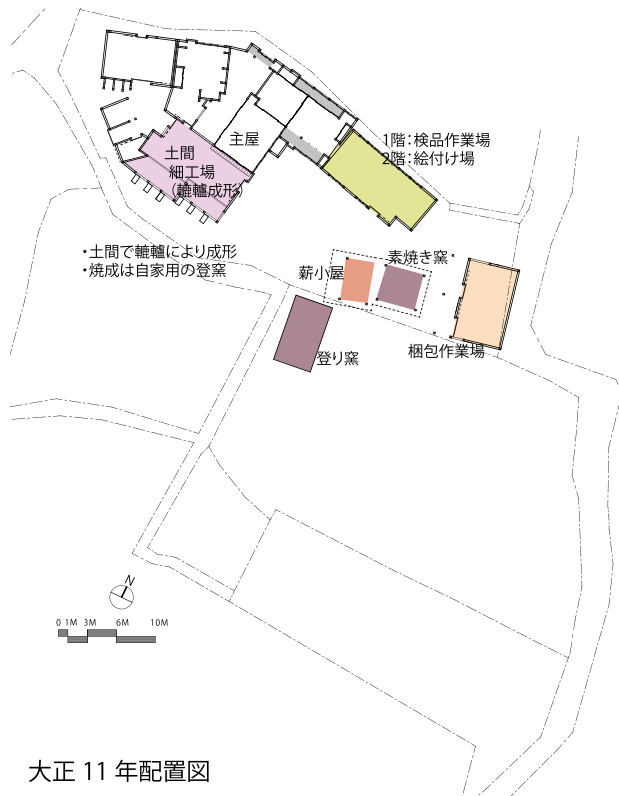


Fig. 9 Changes in the building layout of Oyaseitosyo

②昭和 32 年（1957）頃の建物配置

ヒアリングによると土間での成型作業は昭和 31 年くらいまでで、昭和 32 年頃には南側の道路を挟んだ敷地に細工場が造られ土間にあった轆轤はそこへ移動した。これ以降は主屋での製陶作業は行われなくなった。細工場には土をこねるドレーン機も置かれ、陶土置き場もある。その東側には鋳込み小屋があったが昭和 40 年（1965）頃に除却された。この頃に生地職人が独立して、生地作りは外注となった。主屋が建つ敷地には絵付けをする作業場が現役で残っていたが、水簸に関係する堀川やオロは撤去された。元作業場の四季舎は大正 15 年建築と言われており、ここで釉薬を掛けたり登り窯で焼成した器を並べる作業場として使われていた。昭和初期に石炭窯がこの作業場の東端に築かれ、昭和 40 年代にはガス窯が導入された。石炭窯の導入により素焼き窯や登窯は撤去された。主屋の西側の小屋や風呂、便所は撤去され母屋に風呂や便所が増築された。主屋正面も帳部屋をなくして縁側にするなどの改修が行われた。

③昭和後期～現在の建物配置

昭和 50 年（1975）頃には四季舎の南側に絵付け室が増築された。平成 2 年（1990）に廃業するまでこの配置であった。主屋の敷地にある絵付け室は廃業後も倉庫として残っていたが平成の中頃に除却された。北側のレンガ基礎は残っている。現在は主屋、旧細工場、四季舎になっている旧作業場、その裏の旧絵付け場、四季舎隣の倉庫が残っている。

4・3 平井製陶所

集落南部の寺屋敷通りに南面する敷地に大型の窯元住宅と複数の作業場が建つ平井製陶所が位置する。創業は昭和の初めで現在もこの地で操業を続け、土瓶や急須を製作している。

(1) 平井家主屋（昭和 32 年建設：棟札墨書）

敷地の奥に南面して建つ主屋は昭和 32 年に建設されている。入母屋葺瓦葺き真壁漆喰塗りの 2 階建て平入りの建物で裏の北側部に入母屋葺瓦葺き平屋建ての隠居部屋が増築されている。平面は表に事務所、土間、御前、座敷が並び、御前と座敷の南側には縁が付く。建設時から改築はされていない。裏側は台所、茶の間、仏間となっている。その奥に縁を介して 2 部屋を持つ隠居部屋が増築されている。昭和のこの時期には、主屋の周辺に細工場や倉庫、石炭窯などが配され、主屋の土間で作陶作業は行われていない。土間の左手には最初から事務所が設けられている。座敷の床の間の裏側にも廊下があり収納棚や洗面所や便所が付く。赤井倉もこの様な廊下や収納棚が配されている。2 階は土間と台所上部には部屋があるが、御前の上部は一段高くなった収納となっており、他は小屋裏で部屋としては使用していない。構造で特徴的なのは、和小屋ではなくトラス構造となっていることである。細工小屋や倉庫などの大空間はトラス構造が多いが、住宅でトラス構造は珍しい。主屋の前面と西側にかつての細工場や倉庫、裏の北側の低い敷地には昭和 30 年（1955）建設の石炭窯の煙突と作業場がある。現在はその作業場でガス窯を使用した焼成や絵付けなどの殆どの作業が行われている。その建物の東側の路地の向かいにも倉庫が建つ。この倉庫については次に記述する。



Fig. 10 Hiraiseitousyo with coal kiln chimney remain

(2) 平井家倉庫（昭和 3 年建設：陸梁の墨書）

主屋東側の細い路地を下ると東側に倉庫が建つ。切妻葺瓦葺き真壁造り総 2 階建てである。1 階は倉庫として利用され、2 階は 3 方に連続の出窓がある明るい部屋となっている。検品や梱包作業が行われていた。現在は 2 階を事務所として利用している。小屋組はキングポストトラス構造で、中央の陸梁に「昭和参年五月 建築落成」と墨書がある。

現在中尾郷に残る木造の作業場や倉庫の殆どはトラス構造である。大正 15 年建設の四季舎として再利用されている作業場もトラス構造である。波佐見町の町場にある登録文化財の公会堂も昭和 12 年建設のトラス構造の大型建築物であり、トラス構造の高い技術が波佐見町に保持されていた。平井家倉庫は建設年代が明確であり、無駄のない合理的な構造の建物である。現在は使用されていない作業場が多い中で、この建物は用途は変わったが現役で使用されている。

(3) 建物配置の変遷

①昭和 32 年（1957）頃の建物配置

南面して建つ主屋の前面と西側に細工場や絵付け場、釉薬を掛けていた仕上げ場、鋳込み場、倉庫があり、裏の北側の低い敷地には石炭窯が配置され、主屋の土間での作陶作業は行われていない。事務所は主屋内に設けられている。主屋の前面の庭にトンパンが設けられ器が天日干しされていた。石炭窯が建設される 1955 年以前は同じ位置に登り窯が築かれていた。石炭窯の道路向かいには昭和 3 年（1928）建設の作業場がある。1 階は倉庫として利用され、2 階は 3 方に連続窓がある明るい部屋となっており、検品や梱包作業場として利用されていた。機械化による大量生産を目指し

て高密度に作業場が建ち、天日干しをする庭のスペースも最小限になっている。

②昭和 46 年（1971）～現在の建物配置

石炭窯と薪小屋のあった位置に 1971 年頃にガス窯のある作業場が建設され、全ての作陶作業はここで行われている。分業化が進んだ今では生地作りや陶土作りは外注となり、敷地内に残るかつての細工場や仕上げ場、及び鑄込み場等は不要となり、倉庫或いは空き家となっている。昭和 3 年建設の倉庫の 2 階は現在も事務所と桐して利用されている。



Fig. 11 Changes in the building layout of Hiraiseitousyo

4・3 窯元住宅と作業場の変遷モデル

作陶作業は窯元により石炭窯導入時期や生地の外注開始時期は異なるが、おおよそ図 12 のような建物配置変遷モデルとなる。明治前期頃は江戸時代と同様に主屋の土間で作陶作業が行われ、御前には皿板をかけるトンパンが設けられ囲炉裏の火により乾燥を行っていた。庭での器の天日干しが主であるが、天候によっては御前でも乾燥作業を行っていた。窯は上登窯や下登窯の一部を使用するか、敷地内の斜面に個人、或いは数軒の窯元と共同の登り窯を築いた。機械化が進むと大量生産が可能となり、敷地の空いたスペースに細工場、絵付け場、釉薬を掛ける仕上げ場、倉庫が建ち、敷地が建物でほぼ埋め尽くされることとなる。昭和 30 年初めには土間での作業は行われなくなり窯元住宅は専用住宅となる。大正末から昭和前期に石炭窯が導入され、やがて重油窯に変わり、昭和 40 年代からガス窯に移行する。この頃には分業化が進み陶土作りも生地作りも外注となり、焼成や絵付けなどの最終工程のみを行う窯元が多くなる。同時期に大量生産を目指す窯元は大規模工場の建設が可能な広い敷地があり交通も便利な平野部に移転した。平野部に大規模工場を建設しても主屋のみ、或いは主屋と一部の作業場を中尾郷に残している窯元もある。

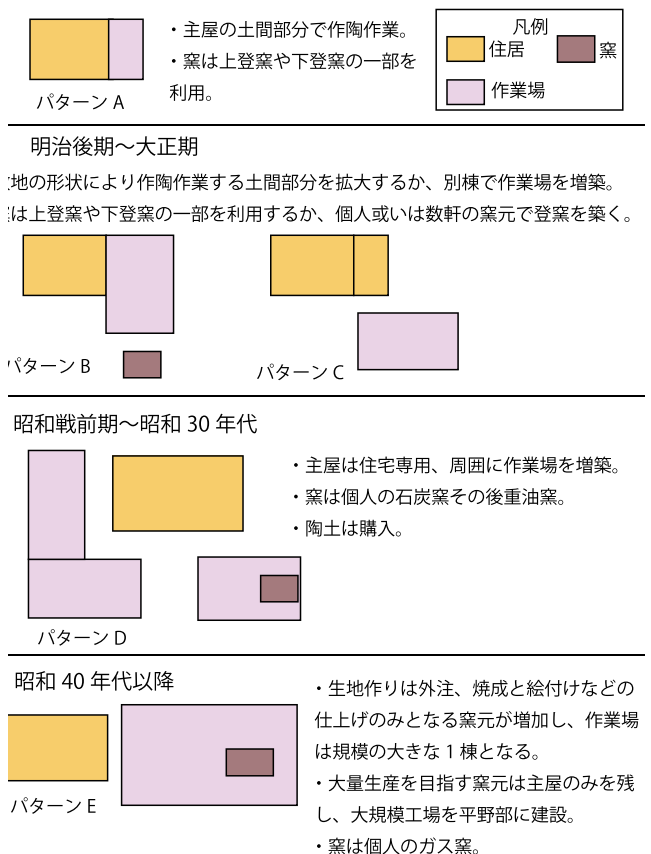


Fig. 12 Transition model of kiln owner house and workshop layout

5. 結論

①陶石がとれる白岳の麓の谷筋に 1640 年代に磁器生産の場として中尾郷集落は成立した。中央を流れる中尾川にあった唐臼や斜面の登窯は機械化により失われたが、上登窯は史跡として整備が進み、伝統的な窯元住宅や窯業作業場及び石炭窯のレンガ造煙突が現存し、窯業に関する時代の積層を見ることができる貴重な集落である。周囲を山に囲まれ、白い陶石の白岳が見える景観は窯業集落らしい特徴的な景観である。

②山奥の谷地に 315 棟の家屋が密集しているのも中尾郷の特徴である。江戸期は主に寄棟茅葺き平屋建て平入り、明治期になると切妻や入母屋の瓦葺き 2 階建て平入りの家屋が建てられるようになった。現在も木造 2 階建て瓦葺で上屋梁間が 3 間程度という規模は維持されている。機械化や窯の変化により地形の制約から解放された窯元達は、交通の便がよく広い敷地が入手できる平野部に大規模な窯業工場を昭和初期から建て始めたことも、中尾郷の景観を阻害するような大規模な建物が立地していない要因の一つである。

③機械化が進み大量生産をしている現在の中尾郷では、主屋と作業場の配置に関する秩序は見いだせないが、伝統家屋の主屋が残る窯元では、主屋の正面を南側に向け、前面に成形した器を天日干しする庭を設け、庭を挟んで作業場が配置されている。敷地によっては主屋の隣あるいは庭を囲むように L 字型に作業場を配置している。

④窯業関係や一般住宅以外にも医院や店舗、かつての旅館などの建物もある。また今は残っていないが、小学校や魚屋、近年はスーパーマーケットもあり近隣集落から買い物に訪れていたという。山奥の集落ではあるが、窯業の繁栄により都市的な景観を持つ地域である。

【謝辞】

建物調査とインタビューに応じていただいた窯元の方々、現地調査や図面作製に協力してくれた学部生の菊池君慎一朗君、古賀千晴さん、今別府拓君、藤原準紘君に感謝いたします。尚、この論文は波佐見町からの受託研究を元に加筆したものです。

【参考文献】

- 1) 山口知恵, 松本 将一郎, 西山徳明「小鹿田焼の里皿山における伝統的な生業の持続と文化的景観の保全に関する研究」日本建築学会計画系論文集 第 74 巻 第 644 号, pp. 2215-2222, 2009 年
- 2) 丸谷耕太, 山下三平, 内山ただし, 小川勇樹「小石原焼の里における作陶に関わる文化的景観の変容に関する研究」日本都市計画学会論文集 Vol.49, No. 1, pp. 83-922, 2014 年
- 3) 波佐見史編纂委員会「波佐見史第 3 巻」波佐見町教育委員会, 1993 年
- 4) 福重菊馬「近世波佐見の窯業」波佐見町陶器工業協同組合発行, 1989 年
- 5) 波佐見中尾郷のあゆみ実行委員会「波佐見中尾郷のあゆみ」2018 年